

4.4.2 ベースラインの検討

(1) Before-After の視点

「4.1 活動団体ヒアリング」より、九十九島漁協による藻場の保全活動は25年以上前に実施されていることから、活動実施前である25年以上前の藻場の分布状況を環境庁の第4回・第5回調査から把握した。

活動実施前の藻場の分布状況を図 4-28及び図 4-29に示す。

活動実施前に藻場の分布が確認されたのはSt. 5（丑ケ島地先）のみであり、優占していた種はオオバモク（ヤナギモク）、アラメであった。オオバモク（ヤナギモク）、アラメは磯焼けや水温上昇により分布域が平戸以北に縮小している種（出典：長崎県における磯焼け対策ガイドライン（平成30年度改訂版））である。

本年度の潜水詳細調査におけるSt. 5の優占種は、マメタワラ、ノコギリモク等であり、一度アラメ場、ガラモ場（オオバモク）が消失したものの、九十九島漁協による藻場の保全・回復活動によって、新たなガラモ場が形成されたと推察される。

以上より、九十九島漁協による藻場保全活動場所のベースラインはゼロに設定可能と考えられる。

ヤナギモク <i>Sargassum ringgoldianum</i>		アラメ <i>Eisenia bicyclis</i>	
生態	低潮線付近～潮下帯の浅所の岩上に分布。雌雄異株。成熟期は夏～秋。多年生で、寿命は5～6年。	生態	水深5m以浅の岩礁帯に多い。成熟期は秋～初冬。成熟は幼体が肉眼視されて1年程度からみられる。多年生で、寿命は4～6年。
形態	藻長1～2m。付着器は円錐形で太い茎を生じ、毎年数本の主枝を生じ側枝はよく発達する。葉は大型の長いへら状で厚みがある。気胞は数cmと大きく楕円形で線形の冠葉を付ける。生殖器床は線状。	形態	藻長1～2mに達する。幼体はササの葉状から次第に葉面に皺ができ、側葉が発達する。2年目からは茎の先端が二叉した分叉枝が形成され、そこから葉部になる。
備考	オオバモクの亜種。温暖化の影響による衰退・消失の指標種の1種で、 <u>減少著しく分布域は平戸以北に縮小。</u>	備考	長崎県ではカジメとも呼ばれる。近年減少が著しく、 <u>分布域の主体は平戸以北に縮小。</u> 食用とされる。

出典：長崎県における磯焼け対策ガイドライン（平成30年度改訂版） 長崎県水産部、平成30年8月

図 4-27 ヤナギモク（オオバモク）とアラメの生態図鑑



図 4-28 活動前の藻場の分布状況（鹿町地区）

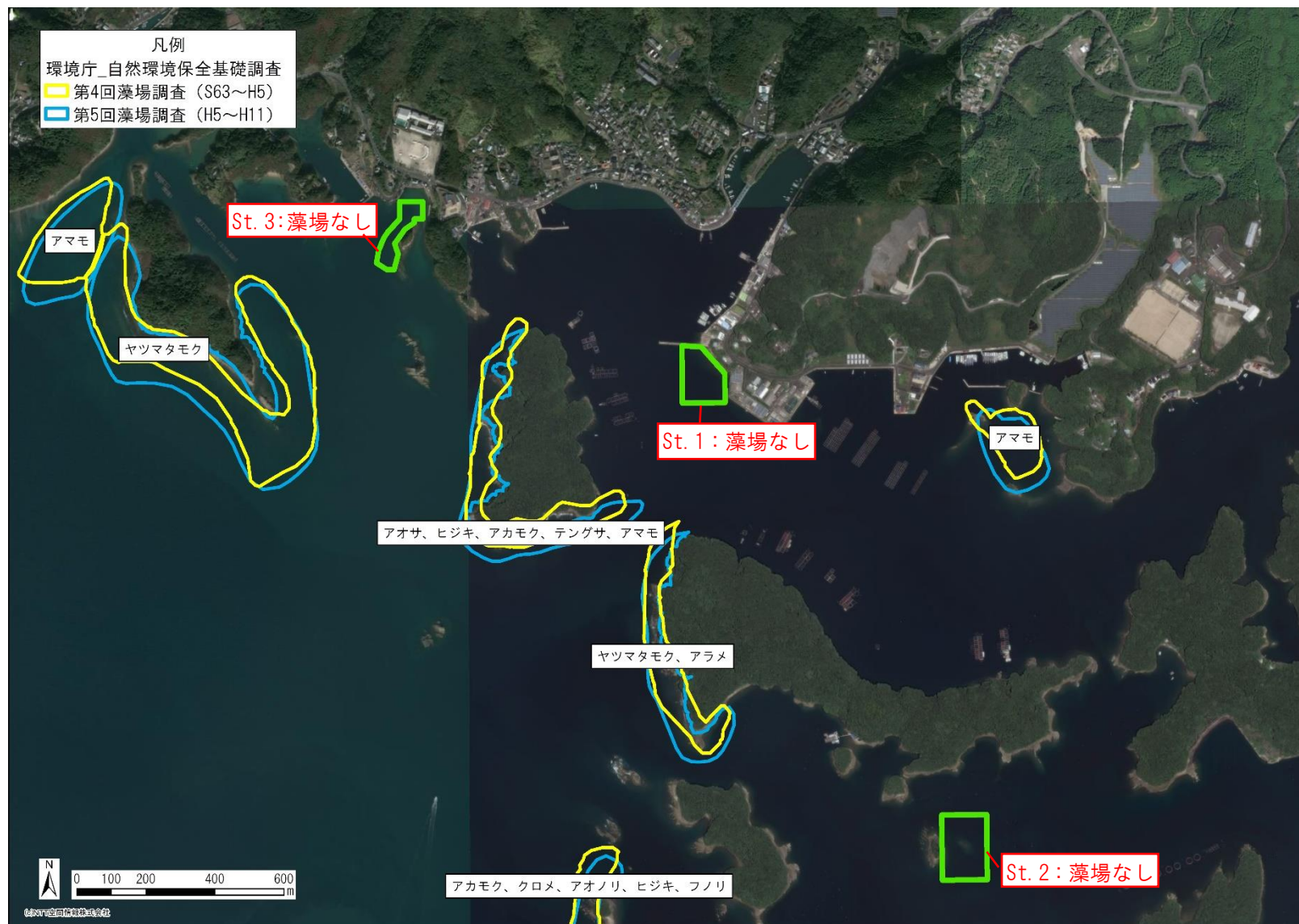


図 4-29 活動前の藻場の分布状況（小佐々地区）

(2) Control-Impact の視点

藻場の保全活動の実施場所と実施していない場所との比較写真を図 4-30に示す。

九十九島漁協によるウニ類の除去やウニフェンスの設置より、活動場所内外でウニ類の生息密度や海藻類の生育量に差が認められた。

以上より、九十九島漁協による藻場保全活動場所のベースラインはゼロに設定可能と考えられる。

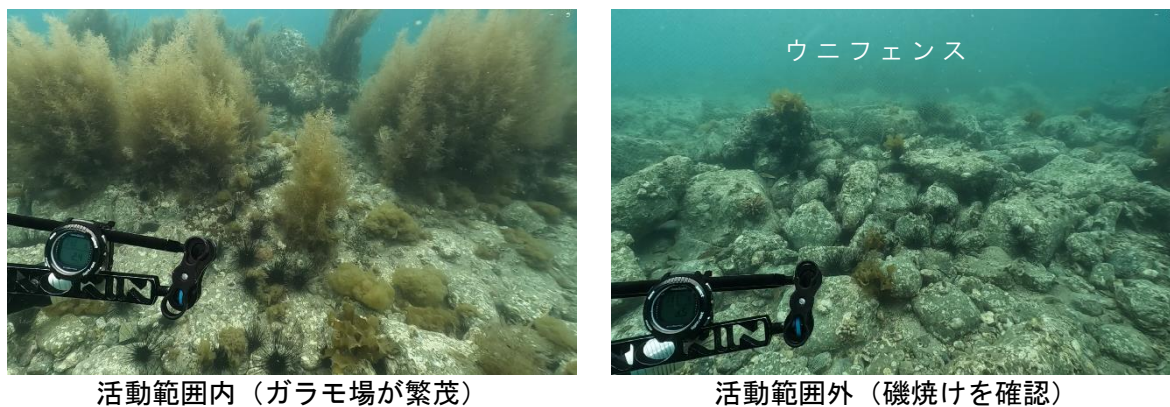


図 4-30 藻場の活動範囲内外の比較

4.4.3 クレジット認証対象の吸収量の算定（確実性の評価前）

調査時に使用した船舶のCO₂排出量とベースラインのCO₂吸収量を差し引き、クレジットの認証対象となる吸収量を算出した。

確実性の評価前のクレジット認証対象の吸収量を表 4-42に示す。

九十九島漁協による藻場保全活動場所のクレジット認証対象の吸収量は、12.2t-CO₂/年と試算された。

表 4-42 クレジット認証対象の吸収量（確実性の評価前）

BC 量 (t-CO ₂ /年)	船舶利用による CO ₂ 排出量 (t-CO ₂)	ベースライン (t-CO ₂ /年)	クレジット認証対象の吸収量 (t-CO ₂ /年)
12.3	0.09	0.00	12.2

※ 小数点第2位以下は切り捨て